

NJ素流協 News

令和4年11月10日
第214号

令和4年11月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

「ノースジャパン100年復興の森」 再生活動を実施

9月30日、「令和4年度 海岸防
災林再生活動」を実施した。参加
者は、NJ素流協組合員、同青年
部会員、役職員合わせて14名が集
まった。この9月は毎週のように
台風が襲来し悪天候が続いてい
たが、当日は、台風一過で好天に恵
まれ作業日和であった。



作業開始です！

鈴木理事長より、今年の再生活
動は、下刈り作業に加え、海岸防
災林を構成するための、裾枝払い
作業となります。と挨拶があり、

作業が開始された。

一同は、持ち寄った刈払機、剪
定ノコギリ、小型チェーンソーを使
い、防風柵沿いと通路の雑草の下
刈り・裾枝払い・ツル切作業に取
りかかった。



裾枝払い作業の様子

NJ素流協管理地の抵抗性クロ
マツは植栽後5年経過し、樹高3
4m、樹冠幅も4mと成長が著し
く、植栽木間の枝も重なり混み合っ
ていた。病害虫の発生原因となる
事から、裾枝払い作業を実施した。

作業は、樹高の1/3(約1m)

の高さまで、樹脂つぼ対策として、
幹から10〜15cmを目安に残してノ
コギリで伐り落とした(残枝は、
次年度に平滑打ちを実施する予定)。
また、ツル切作業は、地際から手
作業で切除し、枝に絡まったツル
の除去も行った。下刈り作業は、
ススキやセイタカアワダチソウな
どが高く茂っており、刈払機を使
用して作業を行った。



下刈り作業の様子

作業終了後は、林内も明るくな
り、作業の達成感が感じられ、爽
やかな笑顔で記念撮影となった。
何より、参加者全員ケガもなく、
安全に作業を終えることができた。

海岸防災林は、飛砂防備、強風・潮風の軽減などの機能に加えて津波被害軽減効果も求められており、仙台森林管理署からのご指導を頂きながら、十分な機能が発現出来るよう、今後も再生活動を進めていく。



作業、お疲れ様でした！

トピックス

令和4年度技術検討会 後編

9月12日、技術検討会「国産材時

代を見据えたスギ赤身土台の活用に向けての技術課題について」を、オンラインと会場の複合で開催した。先月号に引き続き、第2部意見交換の内容をお伝えする。

【司会】

NJ素流協 鈴木信哉理事長

【パネリスト】

岩手県林業技術センター 研究部
上席専門研究員 谷内博規 氏

(国研) 森林研究・整備機構

森林総合研究所 木材加工・特性
研究領域長 伊神裕司 氏

農林水産省 新事業・食品産業部

食品製造課基準認証室

規格専門官 川原 聡 氏

NJ素流協 鈴木理事長 (以下

鈴木) まず谷内さんの実験デー

タを見ると、密度が高い心材部分の方がめりこみ強度が強いという

ことで、心材を使った土台であれば、ヒノキと同等の評価が得られ

るのではないかと思いましたが、データから見て谷内さんはどう感じましたか。



NJ素流協 鈴木理事長

林業技術センター 谷内氏 (以下
谷内) 確かに容積密度は心材(未

成熟部)の方が高いという結果は

ありました。ただ、弱いものも出

てきたということを考えると、心

材だからと、一概に適応させるの

は難しいと思いました。もし使う

のであれば、容積密度なりなら

かの指標でグレーディングしないと

と安全性が担保できないのかなど

という印象です。

鈴木 容積密度などが何らかの形

みてよろしいでしょうか？

谷内 どのくらいのものを使うか
えばこうなるといった枠組みが分
からないので、歯切れよく「はい」
とは言えませんが(笑)。



林業技術センター 谷内氏

鈴木 分かりました(笑)。それで
は総研の伊神さんに伺います。機
械で密度を測る実験を行っています
したが、すぐに実用化できるよう
な機械なのでしょうか。

森林総研 伊神氏 (以下 伊神)

はい、元々その装置は、現場の
製材工場に置いて使っていたもの
なので、実験レベルから実証レベ
ルに移行しています。商品化はし
ていませんが、実用化はできると

思っています。

鈴木 機械的に、心材部分で密度が高くて…というデータが揃うのであればそこを土台に使用して、それ以外を梁などに使うといった仕分けがうまくできそうだと考えてよいでしょうか？

伊神 大径材を適材適所使っていくという考えは必要だと思っております。例えば、髓を含む正角は土台に、外側はラミナなど高強度を要求されるところに使っていく…というような木取りは、スギでもできるのではないかと思っています。
鈴木 40cm上などもっと径の太いものから木取りしたら、例えば、心材だけ土台に取るような木取りはできるのでしょうか。

伊神 今回の例では正角を4丁の木取りで紹介しましたが、角物を取るのであれば、知見から考えると、5、7、9丁と数を増やして、心材は土台にという木取りはできると思っています。
鈴木 いま、北東北では、バーカーの関係で合板に回せないというこ

とで、巨大なスギ丸太の用途が非常に制限されていて厳しい状況です。今後検討課題に入れていただければと思っています。
伊神 今までなかったような木取りをしながらいろんな試験をやっていくというのも一つの方向性だと思えます。



森林総研 伊神氏

レベルで利用実績が十分にあり、防蟻や防湿性能などが歴史的に証明されているのがその3樹種だったのかなと思います。ですが、全国の製材業者のヒアリングをしていた際、スギを土台に使っているところがありました。ですので、スギを利用するという概念が無かっただけで、使うというスタートラインに立てば、また違ってくるのではないのでしょうか。

鈴木 逆に言えば、地域の工務店やゼネコンへのPRが足りないエリアが、米ヒバ・ツガ、ヒノキなどにこだわっていると考えるとよろしいのでしょうか。
川原 ヒノキは土台だけでなく柱でも横架材でも使う余地はあるはずですが、かつてのヒノキの値段の高さが、利用の幅を土台向け、という風に狭めたのかなと。逆に、スギは用途が多いと思いますので、土台に進出していくのはアリだと思います。

鈴木 やはり、スギの心材とヒノキの心材のD-1区分(耐久性)が同じという点は重要なポイントだと私は思います。岩手県内の大手プレカット工場はヒノキの購入に躍起になっていますが、県産材振興を担う研究機関として、谷内さんはどう思われますかお聞きしたい。
谷内 やはり県産材を使うというのが命題ではあるが、今の各工場で見ると、岩手県内だとカラマツやアカマツの集成材を梁や土台に使おうという機運が出てきました。県としては、今すぐ使えるこれらの樹種を進めていって、スギの方はまだ時間がかかりそうだなという印象がありますが、その後、スギの大径材の用途の一つとして土台の可能性はあるのかなと思えます。

鈴木 伊神さんは、今、製材の規格の委員をやっているということで、製材の規格を考える時に、土台に関する話題は出ないのでしょ
伊神 現状はほぼ、土台に関する要望は出ていないです。

鈴木 ちなみに、要望は誰が取りまとめているのでしょうか。

川原 JASの各規格は5年に1回見直しをすることが求められているのですが、FAMIC（独立行政法人 農林水産消費安全技術センター）が製材工場などにアンケートを行い、その意見を取りまとめた上で、伊神領域長が委員長を務めておられる原案作成検討委員会へ進んでいくのですが、今回は土台についての話は無かったという流れになります。

鈴木 ということは、そのアンケートの宛先は、FAMICにおまかせということですね。

川原 そうですね。製材工場だけでなく、物流関係といったところも含めて数百件ほど、広くアンケートを行っています。

鈴木 分かりました。ということ、スギの赤身土台の位置づけをしっかりとしてくれ！という要望は全く無いということなのですかね。

川原 いえ、それについてヒアリングするのはまた別ですが、やはり今、耐震等級といった仕様規定で住宅を建てていますので、構造計算をしていない、即ち、めりこみ強度の出番が無くなっているということが、私が持っている構造関係の書籍でも書かれています。ただ、3階建てや公共建築物になつてくるとめりこみ強度は重要になってくると思われるので、今まで注目されていなかったという話ではないかと思っています。

伊神 規格という点で、JAS改正の中では要望は出てこないということでしたが、私がいろんな方々とお話する中では、大径という切り口から、心材を土台に使えないかということを知ることがしばしばあります。ただ、積極的にやるうかという口調ではないのですが（笑）。

鈴木 森林総研としては、赤身土台の研究は誰かやっていたりしますか。

伊神 今はやってないですね…。

鈴木 分かりました。川原さんに伺いますが、通常、JAS規格を

変えるとなったとき、製材の規格をこうしてくれとか、国土交通省の住宅部局から要望は上がってきているのでしょうか。

川原 製材ではないのですが、基準強度については、国土技術政策総合研究所や、建物の番人である建築研究所、そして森林総研、そこにFAMIC、農水省などが適宜加わって審議され、国交省により基準強度が告示されるので、もしニーズがあれば国交省側からそういう提案はあり得ると思いますし、CLTのようにロードマップを作って国として推進していく品目などは、なおさらそういったアプローチはあっていいと、私の過去の経験からも思うところです。ご質問に直接にお答えできず恐縮ですが…。

鈴木 分かりました。なかなか土台の話にはならないのかなと思います。めり込み強度を考えると、北国の豪雪地帯の積雪は関連があるのでしょうか。

川原 めり込みは、土台に関して

は、長期と短期の区分しなく、積雪時と常時は一緒になっていますが、土台以外のめり込みを考えると、積雪時と常時は関連があります。



農林水産省 川原氏

鈴木 ということは土台のめりこみについては、あまり重要視されないということですかね…。

川原 長期・短期の区分はありますが、なぜ常時と積雪時で区分しなかったのかは、文献を見ただけでは分からなかったですね。

鈴木 私は昔、某豪雪地帯で勤めたことがあるのですが、公共施設であれば、積雪1mを超えたら「雪下ろし計画書」を建築申請に付け

たら、立体トラスの荷重など変更できて素直にパスできました。それはなぜかというと、建築事務所協会の会長のところへ設計を委託したのですが、その先生が、こうした方がいいよとアドバイスをくれたことで成功しました。逆に、雪国だからとといった支障はないのかなと思います。雪が勝手に落ちるとかであれば、土台に対するめり込み負荷がかかるというわけではないということではないですか？

川原 構造計算上はそうです。ただし、例えば、秋田森林管理署の管内はメートル単位で雪が降るので、通常、12 cm角を柱に使っていいと思います。ですが、最近一般流通しているのは10・5角が使われる事例もあるようで、12 cm角と10・5 cm角でめりこみの強度など物理的にどう影響するのか、むしろ専門家のお二人に聞いてみたいです。

鈴木 どうですか？やはり柱の太さとめり込みは関連がありますか？

伊神 10・5 cm角の使用が増えて

いるのですか？全国的にですか？

川原 いえ、秋田でヒアリングしたらそうだったみたいで、なるべく太く、断面は多くなればなるほど構造計算上は良いはずなのですが…。

鈴木 それは、ヨーロッパからのホワイトウッドのラミナを入れて作っている、秋田の集成材工場や外材の集成材工場などたくさんあるので、そのあたりの影響もあるのではないかと私は思います。伊神さんに伺いますが、土台の心材部を製材するときに、製材工場の皆さんが心配するのが、心材部分の乾燥が、赤身の部分は難しいのではないかとことです。それについてはどうですか？

伊神 心材は含水率が高いほど難しいですし、同じ心材でも、心去りと心持ちでは乾燥の難易度が全然違いますので一概には言えないと思います。やはり高含水率のものを、重量選別など仕分けをしっかりとすれば、従来のやり方でもあ

る程度きちんと乾かせると思いますが、黒心など高含水率のものは難しいですが、心材だから難しいというわけではないと思います。

鈴木 分かりました。谷内さんは今回、様々な実験を行いました。他のエリアで実験をやった場合は実験データに違いは出ると思いますか？それとも、場所ではなく密度の関係ですね…という印象でしょうか？

谷内 今回行った実験では、合板用の並材で少し太い紫波町産のスギ丸太を使用しましたが、それらは固い部分・柔らかい部分ばらつきがあつて、容積密度でだいたい

の区分をすることができました。他の県のデータも見ている限り、スギであればある程度、今回の実験結果のような容積密度との関係性は見えるのではないかと思っています。ただ、先ほどのスギの心材の乾燥の話題について、乾燥方法による割れやすさなど乾燥の方向まで視野に入れて考えてみると、分からないことはまだあるなという印象でした。

伊神 ぜひ、そういう実験もやってみてくださるとありがたいです。

鈴木 森林総研には乾燥のプロがたくさん居りますのでそのあたりはご相談いただければ(笑)。最後に、今回は「スギ赤身土台の活用に向けての技術課題について」がテーマなのですが、谷内さんから見て、技術課題のところで「やってみたらうまくいくんじゃないか？」という部分があればお聞きしたいです。

谷内 現実的にモノを作る上でそもそも基準強度6・0 N/mm²というのは、建築・設計の上での材料



ディスカッションの様子

の指標なのか、それとも我々が製造を考える上で守らなければならぬ基準なのか、といった部分の考え方が整理されて、どのくらい足切りラインで材料を探しているのかという所が必要なのかなと感じております。

鈴木 ありがとうございます。伊神さん、最後に、大径材プロジェクト等をやった中で見えてきた、技術的課題はありますか。

伊神 まず、技術的な部分で言えば、製材生産の能率の問題は大きいです。あとは、例えば、梁・桁で心去りの話をする、実はそんなことはないのですが「弱いんでしょ？」と言われてしまいます。生産能率の部分もそうなのですが、普及・アピールといった部分も課題があると感じています。今後、スギの土台利用が広まっていくのも安定供給できるよう、性能面をアピールしつつ、同時に生産体制を整えていくことが非常に大切だと思います。

鈴木 30代の頃全国を調査したこ

とがあるのですが、日本海側と九州の人は、「心去りの方が強度が強い」と言っていました。太平洋側の意見はその逆でした。エリアごとに差異がありましたので、スギの赤身土台も、もちろん技術的課題を整理した上でですが、大丈夫なのだという意識を植え付けることが重要なポイントだと私も感じます。最後、川原さんに伺いますが、やはり業界から要望を出した方が役所は動きやすいでしょうか。

直球の質問ですね（一同笑い）。

川原 林産物JASは、供給できる人が、「規格をこう変えてくれ」と言える…というところはあると思います。岩手で、スギの赤身土台の実績が出来てご提案もいただければ、規格の見直し等、可能性はあるかもしれません。

鈴木 やはり作っている側からのPRや要望は大事だと思いますので業界の方にも話をして、ニーズに応えられるレベルまで供給を増やしていくことが大事だと思いますし、その情報発信にも努めてい

きたいと思えます。本日はありがとうございました。

鈴木理事長が講義・講演を行いました

鈴木理事長は、10月14日に開催された令和4年度みえ森林・林業アカデミーにて、「川上と川下をつなぐイノベーション 素材流通の現場からみる現状と課題」と題し、NJ素流協の取組みの紹介や、素材流通の現状・展望について講義を行いました。

また、10月15日に開催された、みやぎ森林・林業未来創造カレッジ2022オープンカレッジでは、「林業のイノベーション、ウッドショックのこの先」と題して基調講演を行いました。さらに、講演後の新技術情報・意見交換会では、コメンテーターも務めました。

全素協第142回理事会開催

全国素材生産業協同組合連合会第142回理事会が10月6日、東

京都内において開催され、当組合から一条参与兼経営企画管理部長が出席しました。「令和5年度森林整備のための予算の確保等について」として、1. 森林整備事業予算の拡充について、2. 林業のグリーン成長を実現する施策展開について、3. 林業事業体の経営強化について、4. 国産材の需要拡大について、5. 森林環境譲与税の見直しについての5項目からなる要望書を採択しました。

翌7日には、同要望書を持参して全国国有林造林生産業連絡協議会と合同で議員会館と林野庁を訪問して要請行動を行いました。

お知らせ

岩手県における「物価高騰対策支援金」のご案内

新型コロナウイルス感染症の影響による売上減少及び物価高騰等による費用の増加に直面している中小企業者に対する支援金です。

※岩手県以外においても同様の支援を行っていますので、各地方公共団体へお問合せください。

■要件

(1) 岩手県内に本店登記を行っている法人または岩手県内を納税地としている個人事業者

(2) 令和4年4月から9月までの期間のうち、いずれか1か月の売上が過去3年間の中の任意の年の同月比で50%以上減少、またはいずれかの連続する3か月の売上の合計が過去3年間の中の任意の年の同期比で30%以上減少していること

(3) (2)の期間における主な材料や仕入品等の中に前年同月の単価と比較して10%以上価格上昇しているものがあること等

■支援額

(1) 原材料等支援金 仕入等の価格上昇額により定額支給(5万円〜20万円)

(2) 家賃等支援金 基本要件に該当する期間における家賃等の額の1/4の範囲内で支給(上限5万

円/1か月あたり)

■申請期限

令和4年11月30日(水)

軽油引取税の課税免除の特例措置について

「軽油引取税の課税免除の特例措置」は、令和3年の延長措置により、令和6年3月31日までの施

林業者等	林業を営む者、前年度の素材生産量が1,000m ³ 以上の素材生産業を営む者
木材加工業者	一般製材業、単板製造業、床板製造業、木材チップ製造業、造作材製造業、合板製造業、プレカット製品製造業、パーティクルボード製造業、木材防腐処理業を営む者
木材市場業者	木材市場(売場を設けて定期に又は継続して開場され、かつ、その売買が原則としてせり売り又は入札の方法により行われる市場)を開設し経営する事業を営む者
パーク堆肥製造業者	パーク堆肥製造業を営む者

軽油引取税の課税免除特例の対象者(農林水産省HPより)

林業者等	・林業又は素材生産業で使用する製材機、集材機、積込機、可搬式チップ製造機の動力源のための軽油
木材加工業者	・事業場内において木材の積卸しに使用するフォークリフト、フォークローダ、ショベルローダ、クレーンの動力源のための軽油
木材市場業者	・事業場内において木材の積卸しに使用するフォークリフト、フォークローダ、ショベルローダ、クレーンの動力源のための軽油
パーク堆肥製造業者	・事業場内において、堆肥の製造工程または、堆肥やその原材料の積卸し運搬に使用するショベルローダ、フォークローダ、バックホー、パワーショベル、ブルドーザー、フォークリフト等の動力源のための軽油

軽油引取税の課税免除特例の内容(農林水産省HPより)

行となつているところです。この特例措置により、1リットル当たり32・1円減税された軽油の購入が可能となっております。

前回の特例措置の延長に当たり、林業関係者による免税軽油の利用量が少ないことが取沙汰されています。令和5年度には、再び特例措置の延長について審議されることとなりますので、免税軽油の積極的な利用をお願いいたします。

現在、免税軽油は事業者の区分ごとに免税対象機械が定められており、NJ素流協では、免税対象機械の追加について関係方面にお願いをしているところです。

課税免除の申請方法は、各県の振興局等の県税窓口、「免税証交付申請書(窓口備え付け)」を提出し、「免税軽油使用者証」と軽油購入時に使用する「免税証」の交付を受けます。免税証には、10〜200リットルまで購入する軽油の数量ランクがあり、申請時に組み合わせが可能です。

また、燃料タンク等に残留している免税軽油を用途外に使用せざるを得ない場合には、使用後に申告納付することで対応が可能です。詳しくは、県税窓口にお問い合わせください。

青年部会「一貫作業先進事例視察研修」を開催

当組合青年部会は令和4年10月13日、長野県において、一貫作業先進事例視察研修を開催し、会員・



グランドレーキによる地拵え作業

事務局あわせて5名が参加した。今回は株式会社吉本（長野県南佐久郡佐久穂町、由井正隆 代表取締役）が伐採・造林の一貫作業の中で実践しているグランドレーキを活用した機械地拵え作業を視察した。

現地では、由井正宏 専務取締役（岩泉事業所長、当青年部会員）、飯出実 木材部次長にご説明をいただいた。

実際に運転しているオペレーターの方からも、グランドレーキによる地拵え作業の感触やコツなどを伺うことができ、参加した会員に



実物に興味津々の様子

グランドレーキは、鉄製の刃部分に柄となる丸太を現地調達して取り付け、グラップルで掴んで作業するもので、この機械地拵えにより、地拵え作業自体の効率化だけでなく、下刈りの軽減、植え付けの効率化にもつながっているとのことであった。

とつても大変有意義な研修となった。

視察を受け入れてくださった株式会社吉本様に厚く御礼申し上げます。

令和4年度第1回林業講演会を開催します

今年度の第1回林業講演会を次のとおり開催します。

今回は、林業機械メーカー及び販売代理店から7社をお招きして、最新林業機械等のプレゼンを行っていただきます。また、各社ブースを設置し、講演会終了後には、各社ブースにおいて情報交換、カタログ配布等の時間を設けます。つきましては、ご多用中とは存じますが、皆様のご参加をお願い申し上げます。内容の詳細、参加申し込みにつきましてはN J素流協ホームページをご覧ください。

【テーマ】林業機械の現状

【日時】令和4年12月1日（木）

講演会…13時00分～16時00分

ブース開放…16時00分～17時00分

【会場】ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング 4階メトロポリタンホール南（定員60名）

※Zoomウェビナーによるオンライン配信も実施（定員500名）

カラマツ杭材造材のポイント

近年、台風などの影響による土砂災害が発生しており、復旧工事に必要なカラマツ杭材の需要が高まっています。当組合にも問合せがあり納入事例もあります。今回は、カラマツ杭材を造材する際のポイントを以下のご紹介いたします。

●長級 3m・4mの直材（現在は3mの問合せが多い）

●径級 8～13cm

※節は多節であっても平らに払えば納入可（ハーベスタ等で枝を払う場合は、複数回行ってください）

規格や納入方法は納入先によって異なるため、納入の希望がある場合は、造材前に担当者に連絡して下さい。

ちよつと気になる木の話

外材に代替時代から
国産材に代替時代へ
—関東大震災復興から学ぶ—

現在、北米産広葉樹で人気だつた4樹種の国産材利用が強化されている。ウォールナット、ブラックチェリー、ホワイトオーク、チェスナットである。日本においては、同じ樹種であるオニグルミ、ヤマザクラ、ミズナラ、クリとなる。

しかし、逆の国産材から外材に代替した時代には、同じ樹種で代替した訳ではない。これは、関東大震災後の復興時が始まりである。この時は、急激な木材の大需要創出により、国産材で供給が間に合わず、外材の緊急輸入に入ったのである。東京駅側の森ビルの地下杭が米マツだったことは有名である。すぐ側の東京駅ビルの地下杭が南部アカマツなので、外材に代替である。

この時、輸入材に名前をつける時、樹種名を正確につけるのではなく、日本の樹種と代替するネーミングがされた。※掲載した表のとおりである。

俗称	属	学名	樹種名等
米ツガ ⇔	ツガ属	<i>Tsuga heterophylla</i>	ウエスタンヘムロック アメリカツガ
米マツ ⇔	トガサワラ属	<i>Pseudotsuga menziesii</i>	ダグラスファー アメリカトガサワラ
米ヒ ⇔	ヒノキ属	<i>Chamaecyparis lawsoniana</i>	ローソンヒノキ
米ヒバ ⇔	ヒノキ属	<i>Chamaecyparis nootkatensis</i>	イエローシダー
米スギ ⇔	クロベ属	<i>Thuja plicata</i>	ウエスタン レッドシダー

梁や杭に使われていたマツの代りに米マツ(ダグラスファー)、土台に使われていたヒバの代替に米ヒバ(イエローシダー)、造作用に

使われていたスギの代替に米スギ(ウエスタンレッドシダー)、他にもツガの代替に米ツガ(ウエスタンヘムロック)、ヒノキの代替に米ヒ(ローソンヒノキ)となったのである。こうして、緊急需要に応えたといえる。戦後、外貨不足から外材輸入は停止したが、戦後復興期・高度成長期時代には、再び輸入が始まり、外材時代を迎えることとなり、北米材がこの時代を牽引したといえる。

かな。もちろん、松くい虫被害地には優良木は少ないが、高標高、高緯度地帯にはアカマツが存在している。無被害地域も結構残っている。米マツ丸太の単価から考えれば、代替が進む要素は十分である。

その際には、木材・建築関係者ともに、ネーミングは、米マツ、米ツガ、米ヒ、米ヒバ、米スギであった。その後の、スプルース、ラジアータパインとは、ネーミングでは一線を画していると思われる。

次に、「米スギ」↓「スギ」である。近年話題となっているアメリカ向けのスギフェンス材輸出とは、真にこのことを表している。日本人が、日本の「スギ」に似ている木に「米スギ」と名付けた。アメリカ人が米スギ不足の中、米スギに似ているものを探せば、日本のスギとなる。ウエスタンレッドシダーの代替は、クリプトメリア ジャポニカなのである。日本でも米スギは使われていたが、製材時の病気の元ということで、廃れてしまった。これからは、レッドシダーの名前の通り、赤身も役立つかもしれない。関東大震災後の日本人のネーミングが、国産材時代の一助になることに思いを巡らす頃である。

通称ウッドショックもあり、逆の、外材から国産材代替の時代に入ったときには、このネーミングこそが手っ取り早くできる鍵といえる。一番は、「米マツ」↓「アカマツ」

ある。

令和4年10月分の販売実績

樹種	合板・LVL用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	10,635	93.6	89.6	8,968	131.3	123.8	19,604	107.8	102.5
カラマツ	5,157	107.6	143.3	282	40.7	17.0	5,439	99.1	103.3
アカマツ	2,763	152.6	86.2	489	1,022.4	542.1	3,252	175.0	98.7
その他	0	*	*	371	49.3	126.6	371	49.3	126.6
合計	18,556	103.3	99.3	10,110	121.5	108.8	28,666	109.0	102.5

樹種	燃料用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	4,382	78.3	151.5
カラマツ	2,573	91.2	48.8
アカマツ	1,598	193.9	164.5
その他	56	59.0	56.5
合計	8,609	92.2	93.2

樹種	今年度累計			
	合板・LVL用 (m³)	製材・集成材・その他用 (m³)	計 (m³)	燃料用 (t)
スギ	91,730	57,568	149,298	28,000
カラマツ	26,606	13,796	40,402	19,092
アカマツ	16,320	1,355	17,675	10,615
その他	7	2,593	2,600	602
合計	134,663	75,311	209,974	58,308
目標達成率 (%)	56.1	43.0	50.6	43.2
計画量	240,000	175,000	415,000	135,000

注)*印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【令和4年10月の需給動向】

- 合板・集成材等 国産材製品の荷動きが急激に悪化し、各工場の原木在庫が過剰となっている。
- また各工場、原油・電気代・接着副資材のコストが大幅に上がったことで製造コストを圧迫している。
- こうした影響から原木は価格は値下がり傾向となり、納入制限も発生している。

耳からウロコ

旭川「森林の市」思い出
— 夫婦の話題2つ —

東京で森林の市が開催され、地方での開催が始まった頃の話である。旭川の森林の市が、旭川の局の敷地で開催されていた。当然、木材会社の「木製品」や「木工品」も並べられていた。私の関係者も、秋だったのでクリスマスツリー用のマツの木やクリスマスリース用の「山ブドウのつる」や「松ぼっくり」をテントで販売していた。

とあるテントのブースでは、茶色になった「ススキ」が売られていた。この当時、生花用としてお花屋さんでも販売されていたのである。ここに、山仕事をしている職員が仲良く夫婦で現れた。奥様が「ススキ」を見て、「これ買います。」と話すと、夫が「バカッ!!こんなもの毎日山行っているから、俺がタダで採ってくるからいらない。」と反論し、「どうしても今日欲しいなら今から採りに行くよ!!」と大きな声を出した。しかし、「ススキ」は奥様を買われた。買う

前の発言は、「あんたに頼んだら採ってきたぞ♪で、酒代の方がめっちゃめっちゃ高くつく...」であった。後は、何も言わず、笑顔で立ち去った。

次は、ミス〇〇の話である。この時、「ミス森林の市」が公募されていたのである。小さなイベントなのに、なかなかの試みであった。公募の中から選ばれたのは、教育大学の学生さんで、ミス〇〇らしい姿で、実行委員会の若い職員の案内で会場の中をあいさつしながら回っていた。会場は華やかな雰囲気となっていた。おっと! 標題の夫婦の話ではなかった。ちよっとお待ちください。

秋が終わり、冬が過ぎて春の兆しの頃、新聞にコラムが掲載された。何と!! ミス森林の市の人である。「学校の先生になることを夢みていました。森林の市で知り合った職員と結婚して、東京に行くことになりました」である。

こんなことってあるんだなあ。森林の市が『縁結びの場』になったのである。今なら、共働きで、学校の先生になった気もするが、30年以上前の話である。森林の産物は貴重な財産である。